

学位に付記する専攻分野の名称の在り方検討分科会（第5回）議事要旨

1. 日時 平成23年5月23日（月） 10:00～12:00

2. 場所 日本学術会議5階 5-A(2)会議室

3. 出欠 （出席7名）

本田委員長、藤田副委員長、吉川幹事、小林委員、濱中委員、森委員、
吉田委員

（参考人1名）

大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会委員長 北原 和夫

4. 議事

（1）学位に付記する専攻分野の名称の在り方検討分科会報告書構成案－2（吉川幹事）

（2）意見交換

○今年度から情報公開を義務付けるとしているが、それはどのレベルの規定でどの程度までか調べて欲しい。もしそれが足りなければ後押しするべき。それはできる限り分かり易くしなければならない。

○イギリスの QAA が in のあとに with を付ける場合のガイドラインを出しているが、ディプロマサプリメントで対応するという方向性でも良い。

○事実があるのにあたかも無いが如く書いてしまうのはまずい、一般的でない例もあるという注記は一応した方が良い。

○必ずしも学位名は学科名と同じではなくて良く、学生のためにも国際的に通用する名称を付記して欲しいというメッセージが必要。

○参照基準の基本方針や分野の理念・哲学を踏まえつつ、カリキュラムの中核的な内容を反映するような名称を付記するのが望ましいが、学際的な分野ではとくに世界の認識の仕方や世界への関与の仕方について判断するのは難しいので、それを書く必要はないかもしれない、広く認知されているような名称を付けることが好ましい。

○教育組織上の分野と学位名称の分野を分離するということを明言して、高等教育行政上問題が起きないのかということに関しては文科省の担当者と若干の折衝をする必要がある。学位の分野が変わった時に審査を受けるというその適用がどこまでかということはまだ理解できていない。

○過去設置審で永遠と認めてきたものをもう一回戻すという話になり兼ねない。

○提言しても全く影響がないようであれば提言をする必要がない。

○早稲田の教育学部は（理学）を出しているが、一応理科教育を入れて教育学部の一部であるという形にしている。それがいいのかという議論は学部解体論に向かっていかざるを得ない。我々がここで議論しなくてはならないのは多様性の問題、学問分野に立脚していないような名称がでてくることに対する懸念、そうであれば分離していいか否かというより組織名称に捉われる必要はないというようなもう少し緩やかな表現にとどめておくことで足りるのではないか。そのような例は多くなく、

学内で一定の抑制もかかる。

- 過去に多様な学位名を認めてきたという問題、それは教育内容に基づいたものにして下さいと言わざるを得ない、そうすると設置審の在り方をどうするかという話になってしまう。もう一つは新しい組織を作るときに、教育内容はそれほど変わらないのに学内的な力学で同じ学位は許さないということで結果的に組織名や学部名で出している問題、それについては学内の軋轢を生むかもしれないが積極的な言い方で提言してあげた方が良いと思う。
- 社会学、教育学、心理学が合わさった人間科学部というのがあるが、本当に3分の1ずつ履修していたら人間科学としか言いようがない。どれかを選ぶと一方で異論が出てくる。
- 人間科学はカリキュラムや学習の内容を反映した名称が望ましいという基本原則には反してない。
- 先祖がえりの問題やバラエティの問題は日本語による学位の階層化を上手く表現できればある程度解決できる。
- アメリカのように細かな下位の専門分野の内容については学位記等の本文中に記載してはどうか。
- 今までは新しい名称が入ることについてどうするかということについて考えてきたが、昔からある名称の教育学部が理学を出していいのかといった問題はあまり考えてこなかった。結論は出しにくいので、問題提起のみにしてはどうか。
- 教育プログラムということを強く打ち出すのであれば一つの学部の中で多様な学士号が出ることは容認せざるを得ない。学問分野に立脚していれば良いとせざるを得ない。
- いくつかの例を問題提起するのは意味があるかもしれない。内容と名前が一致しないというパターンと過度に細分化してしまったというパターン、もう一つは広すぎるというパターンもあって、人文社会科学はやりすぎの感が否めない。
- 濱中先生に次回までにその例をいくつか提案して頂きたい。公表せずに委員会の中の検討材料として。
- 学位を変更する際17分野が異なる場合には届出でよく、また学際的な分野も一定の許容範囲があるような印象をもっている。実際に設置審で何が起きているのかということは良く分からないので、現場にいる人と話をしてその辺りの感触を掴みたい。報告書が謳う内容があまりにも衝撃的すぎて影響を及ぼし過ぎるのであれば、何らかの修正についての検討が必要だと思うし、文科省や中教審の意見によって方針を変えるということではないが、ある一定の現実的な目線というのを踏まえておかないと机上の空論で終わってしまうので、50年後の在り方を見据えてそのステップとしてどこまで打ち出せるかということを確認しておきたい。
- 文科省の担当者は運用の仕方は説明できるが影響の与え方は判断できない。どう在

るべきかというのがこちらにあって、それをぶつけてみた反応を見てみたいということであれば、誰かに来てもらって話を聞くことはできると思う。

- とりあえず英文名称について教育課程の方針に基づいて検討してもらった後に、日本語についてもそれとすり合わせをして下さいというのも一つの在り方だと思う。個人的には括弧内に付記する名称というのは大括りの分野であっても専門分化したものであっても構わないと考えていて、日本語の名称に関して特段の要請をする必要があるとはそれほど強く思っていない。それは最終的には大学の判断なので、日本学術会議としては基本的な考え方を示して、学問分野に立脚してその中で重点を置いた専門分野、その周辺のなものを含めて専門学校とは違う教育を行っているということを表す名称を付記してくださいと提言するのが好ましい。また、設置審はディシプリンを教えられる教員がそこに配属されるかというのは一応見ているので、当然ディシプリンを専門とする教員が教えているという前提に立ってこの話をしている。
- 設置審は設置後 5 年間アフターケアを行っているが、学位の名称についてはあまり見ていない。5 年以上経つと届け出だけでよくなるというのも問題がある。
- 日本語表記を例えば学士（文学－〇〇）や（文学／〇〇）と書ければ英文名称と同様に階層性をはっきりできる。
- 親委員会及び当該分科会の設置期限が近づいてきているので今後の方向性についてお伺いしたい。
- 6 月までに報告書を仕上げるのは不可能であるので、今のメンバーと 1 年程度の期間により再設置して、できれば第 21 期が終わる 9 月までに完成させたい。
- 次回は濱中先生に例を出して貰うとともに、文科省の担当者にお越し頂き、学位の分野を変える際は認可を受けなければならないが、学際的な分野に関しては特に曖昧な書き方をしているので、その運用の仕方を確認したい。もう一つは日本語で階層を増やした場合に支障はないのか、また、学部学科名と学位が同じでなければいけないというのは何か根拠があるのかについても確認したい。